

---

近代日本における女性の  
「自由と平等の論争」についての考察  
“Freedom and Equality of Dispute”  
Regarding the Modern Japanese Women

豊田 雅人  
TOYOTA Masato

---

### はじめに

本論文は 1970 年代における主婦の立ち位置を 1963 年に創刊された一冊の投稿誌『わいふ』を元にして考察するものである。周知のように 1973 年に起こったオイルショックは、日本社会に構造変換を促すきっかけとなった。半面、日本はこの大事件によって、高度成長期が終わりを告げた。同時に、それまでの二流三流品の製品輸出国であった日本が内需拡大によって GDP を押し上げるとともに、工業製品の質的向上もこの時期に起こった時期とも重なっていったと考えることもできる。結果的にはオイルショック以来、内需消費型社会の本格的な到来が、世界の一流品に引けをとらない質的向上を図ることとなり、「MADE IN JAPAN」が粗悪品と同義であった時代から脱却したと考えても良い。これはそれまで「金の卵」と言われていた中学卒業の集団就職者たちにとって代わり、パートタイム主婦の採用へと生産現場が移行していった時期とも重なることとなる。要するに一連の流れの中から製品の生産工程がルーティンワーク化していった（すなわち生産現場における職人芸の追放といった）ことによって、日本製品の質的向上が図られていった時代の画期としても見逃すことはできないことを意味するのである。

今ひとつ概観すれば、近代日本は「自由と平等のせめぎ合い」の歴史でもあったと筆者は考えている。自由ばかり強い社会では不公平が増してひずみが生じ、平等ばかりだと社会が活力を失ってしまう。だからこそ、日本社会はそのバランスを取ってきた。しかも近代以降は 2 つの思想を分けて考えなければならないことになってしまったために、あたかも定立するものかのように考えられてきてしまった。しかしながら 1910 年代から起算してアジア太平洋戦争をもはさんでもなお、1970 年代までの日本は間違いなく「平等」を希求する社会であった。全世帯の収入の平均値から算出される相対的貧困のみならず、生活が成り立たないほどの絶対的貧困が、未だにあったからである。そして 1980 年代以降、内需拡大の掛け声とともに日本はバブル景気まで突っ走った。それから失われた 20 年を経て、2001 年以降は新自由主義が突出している。

かくして 2001 年以降、「平等」は悪とされ、競争原理が働いているかのような「自

由な社会」を日本社会構造は偽装した。なぜ偽装なのかといえば、そもそも個人個人のスタートラインが違うことを織り込んだ上で「自由競争」させているからである。しかしながら戦後の日本は長らくアフーマティブ・アクションではなく「結果の平等」に重きをおいてきた点が重要であると筆者は考える。

中江兆民（兆民は長らく本名の篤介を名乗っており、兆民は『平民の目覚まし』（1892年）以降の筆名であるが、本論文では当初から兆民を用いる）は「自由を以て軍隊と為し、艦隊と為し、平等を以て堡壘と為し、友愛を以て剣砲と為す」（中江 1965（1887）：122p）<sup>(1)</sup>としたが、ここで考えてもらいたいのは悪平等を唱え、かつての根性論で人生を乗り切れた人が生きていた時代は、上記の「平等」に力を注いでいた時代であったはずである。それはさまざまな批判を受けようとも、自由民主党が地元へ利益還元を選挙公約として勝ち上がってきたことから明らかである。

つまり自由民主党は「地元有権者の声」をバックにして国会を取り仕切ってきた。そして行き過ぎた利益誘導に待ったをかける「国民の声」を代表してきたのが日本社会党という構図を長らく取ってきたのが日本の政治的状况であったと述べて良い。ところが1994年に成立した村山富市政権になって日本社会党は、その党是を自ら引きちぎり、自由民主党と一体となってしまった。こうして「国民の声」は行き場を失ってしまい、以来民衆にとっては一種の政治的漂流が起こったのである。2009年の民主党政権の成立は、それ以前の最大野党であった新進党から始まった迷走を一応収束させはしたが、政権交代後に国民の声を受けるだけの力量を持ちあわせてはいなかった。その上で現在のような新自由主義が有力な政策として取り上げられ続けている。

小熊英二は、日本における戦後民主主義について「アメリカの影響を受けながら、共産主義への信仰を持つということが、どうして可能なのだろうか？」（小熊 2002：15p）<sup>(2)</sup>と問いかけている。そして戦後民主主義という言説は、それと代表される知識人が明治人として共産党とは距離をとっていたとも指摘もしている（小熊 2002：15-16p）<sup>(3)</sup>。また原武史は1970年代以前、1960年代の生活空間が、団地文化はソビエト式、そして生活様式はアメリカ式（だと、当時は疑うことのなかった消費社会への憧れ）のハイブリットな様式であったことを看破している（原 2012：30-44p）<sup>(4)</sup>。

少なくとも小泉純一郎政権以前の自由民主党は、この平等感の達成に近かったといってもよい。そこで筆者は今一度「平等」について考え直す時期に差し掛かっているのではないだろうかと考えたのである。

翻って考えれば日本は自由主義陣営と社会主義陣営という2つの狭間で、それらの優れた部分を、あるいは取り入れたかった部分を取捨選択してアジア・太平洋戦争後の日本国家の形を成り立たせてきた。それは明らかに鶴見俊輔の述べたように戦前の分水嶺である「天皇の臣民であること」だけを基礎教養として義務教育を終えただけの初等教育出身者と、「国家の中樞を担うべく培養されてきた高等教育機関出身者（いわゆる旧帝大出身者）」の階層断絶という戦前の国家体制が持っていた、根本的欠陥を凌駕する国家体制であった。鶴見は「十五年戦争の始まるまで、日本の教育体系は2つに分かれていました。小学校教育と兵士の教育においては日本国家の神話に軸をおく世界観が採用され、最高学府である大学とそれに並ぶ高等教育においてはヨーロッパを模範とする教育方針が採用されていました。日本の指導者となることを期待され

ている人々は、国際的な大海においてこの国のカジをとって進めるために十分な知識をもつ専門家として訓練されなければなりませんでした」(鶴見 1991 : 38-39p)<sup>(5)</sup>として前者を「密教」、後者を「顕教」として分けて考えていたとしている。

そして日本は、アジア・太平洋戦争の敗北後に初等教育にあった天皇の神話に軸をおく世界観を取り去る以外は、ほぼそのままこのシステムを温存し続けた。特に官界においては「顕教」の部分尚更のこと強固なものとなった。しかも敗戦からの復旧ではなく、復興のために日本を再構築していったのである。その結果が1955年に戦前の工業水準まで日本が戻ったことを示す、1955年度経済白書の「もはや戦後ではない」というあまりにも有名な一節へとつながっていったのはいうまでもない。

そして1970年代は時折しも主婦の立場が揺らぎ始めた第3次主婦論争まっただ中であつた。ここから後の主婦論争は第3次主婦論争を大きな軸として発展し続け、現在まで続く第3次主婦論争以降の主婦論争の大きな土台は、1970年代に完成したと仮定した。そこで章を改めて家事労働について自由と平等とに絡めて述べていきたい。

## 1. 女性と家事について

女性と家事労働を考えるならば、ヘンリック・イブセン (Henrik Johan Ibsen) の「人形の家 (*Et Dukkehjem*)」を抜きに考えることはできないであろう。最初は貞淑な妻であり母であったノラ (岩波文庫版ではノーラ) の心理的変化が最後になって、一人の女性として生きていくまでの葛藤を描いている。ただ問題なのは、ノラはすべてを捨てて宛もなく一人の女性として目覚めていくという唐突な幕切れである。彼女は夫ヘルメルに向かって「(前略) あたしたちの家は、ただの遊び部屋だっただけよ。あたしは、あなたの人形妻だったのよ、実家でパパの人形っ子だったように。それに子どもたちが、今度はあたしの人形だった。あたしはあなたが遊んでくれるとうれしかったわ、あたしが遊んでやると、子どもたちが喜ぶように。それがあたしたちの結婚だったのよ、トルヴァル。」<sup>(6)</sup>と今までの結婚生活全てが、ままごと遊びであったと否定してみせる。日本では1911年に松井須磨子によって上演された。この松井須磨子版「人形の家」を巡っては『青鞥』同人の多くが好意的であった。上野葉はノラの取った行動を賛美しつつ、その後のことを心配し、夫の偽りの愛情ではなく自立する中で真の夫婦愛「立憲共和的家庭」なるものを造り得るだろうとしたし (上野 1991 (1912) : 40p)<sup>(7)</sup>、加藤みどりもまたノラの覚醒を劇の中から見出し、「第一に、自分は一個人間だという事を悟りました。人間なら今までの人形の衣装を脱いで、真の人間とならねばならぬ。妻という名、母という名の許に、良人の偽りの愛に満足してのみいられなくなりました。第一に良人はこの八年間、自分に真面目な相談一つしなかったという事を考えました」(加藤 1991 (1912) : 53p)<sup>(8)</sup>といった具合に好意的な意見を述べているが、らいてうだけがただひとり、怜悯でクールな目を向けている。「ノラさん、あなたのように徹頭徹尾、本能的な盲目的な女が十四、五の小娘なら知らず三人の母親としてあろうとは日本の女にはちょっと信じられません。」(平塚 1991 (1912) : 62p)<sup>(9)</sup>と書き出しからして手厳しい。そして世間の中で揉まれていく覚悟があるのかと問い、それが捨てていった家族・家庭が自分自身の「空虚」なるものであったことを内省し、

いかなる他者をも愛するだけの技量をノラに求め、もしもそれが出来なければ「この奇跡を身に現すことがおできにならなければ、ピストルを、毒を御求めなさい、さよなら。」(平塚 1991 (1912) : 69p)<sup>(10)</sup>と突き放す。らいてうのリアリティあふれる主張は、妻として、そして母としての立場の危うさを、そして未だ内政が足らず自己覚醒に至っていないまま幕切れとなったノラの行動を批判することで自立の難しさを的確に、そして残酷なほど捉えている。つまり自由と平等を求めるならば、同時に他者をも愛せと言っていることになるのである。

このことは1970年代になっても同じことで、ルース・シュウォーツ・コーワン (Ruth Schwarz Cowan) は主婦の家事労働が電化されていくに連れて、むしろ増えてしまったことを述べている<sup>(11)</sup>。家事労働は電化によってユニセックスな領域になったにも関わらず、依然として女性の領域とされたためである。

一方の日本における家電化は家事の効率化を促すものとして賞賛されるべきものとして受容されていった。加納実紀代はこれを1949年から『朝日新聞』で連載されていたチック・ヤング (Chic Young) 原作の『ブロンディ (Blondie)』という漫画作品からひも解き、当時は遠い存在であったアメリカの旺盛な消費 (そして電化) 生活を紹介している。敗戦国日本に対し「また1949年1月からは、アメリカのチック・ヤング作の漫画「ブロンディ」が『朝日新聞』に連載され、焼けたらボンと飛び出すトースターや、洗濯機・掃除機などの電化製品をフルに使った主婦ブロンディの生活を描き出していた。そこに描かれている電化製品は、いまからみればどれもこっけいなほど大きくて旧式なものだが、井戸ばたにしゃがみこんでタライで洗濯していた日本の主婦には、ただただ溜息の出るものだったろう。それはまさに、勝者アメリカの偉大さを見せつけるものだった。」(加納 1987 : 32p)<sup>(12)</sup>と、その消費文化の差を見せつけることで日本人の心情を徹底的に叩きのめした。『ブロンディ』はまさしくアメリカ消費生活そのものであったと同時に、日本が目指すべき理想的な生活様式を主婦層に描き出したのである。

しかし岩本茂樹が『ブロンディ』そのものを扱う著書中で述べているが、彼ら一家の社会階層がどこに当たるのかをアメリカ社会をフィールド調査したデーヴィスを中心とする経験的研究と、ニューイングランドの「ヤンキー・シティ」を中心として調査研究したウォーナーとランツによる階層分析によって、ダグウッド・バムステッド家 (ブロンディの夫のフルネーム ; 筆者注) が部屋数 (デーヴィスによれば、上流は8から10室の部屋を持つがバムステッド家はそこまでの部屋数を持ってはいない) ことから上流ではないこと、しかもその家がかかなり老朽化した家であるというウォーナーの指摘によって中流の上でもない、従ってバムステッド家は中流の下であることが導きだされている (岩本 2007 : 65-76p)<sup>(13)</sup>。

しかしながら、あくまでも敗戦直後の日本においては、彼らの暮らし向きが十分に中流の上位に見えたことが容易であったことは想像に難くない。では『ブロンディ』が果たした役割とはなにかといえば、敗戦国日本にアメリカに対する屈辱と羨望の両方をもたらす作用を果たしたと言ってもよい。多くの占領政策は日本の官僚制度が、いわば代行する形で円滑に進められていた中で、報道についてはGHQが直接指導してきた点をも指摘しているのである (岩本 2007 : 82-87p)<sup>(14)</sup>。

『ブロンディ』の世界観は日本人の心の中にアメリカの中産階層（ミドル・ロウワー）の生活であっても（当時の日本人の生活環境では知る由もないが）、これだけの消費生活を謳歌しているという部分を見せることで画期的であった。日本がそれに追いつくのは1960年代中葉まで待たなければならなかったからである。

1960年代は高度経済成長期の波に乗って、そのまま日本復興を軌道に載せることに成功した時代であった。労働力も敗戦直後に生まれた世代（すなわち第一次ベビーブーマー）が日本社会を支えた。それと同時に平等感の希求も、より強く求められる段階に入った。それは社会の意識が求めた当然の結果でもあったからである。この点について章を改めてさらに述べたい。

## 2. 「自由」より「平等」の希求へ

たとえば浦山桐郎監督作品の映画「キューボラのある街」（1962）では吉永小百合扮するヒロインの石黒ジュンが高校進学を強く希望する。しかし東野英治郎扮する父親の辰五郎の荒みきった生活態度とあいまって貧困にあえぐ石黒家にはその余裕はなく、やむなくジュンは中学を卒業すると同時に一旦就職を決断する。映画の中では新しい職場に馴染めずにすぐに辞めてしまい、ヤケ気味になった辰五郎が高校進学を望む子どもたちに向かって「ダボハゼの子はダボハゼだ！ 中学出たら皆働くんのだ！」と叫ぶ。それでも結局ジュンは定時制高校へ進学することを決意するところで、そして父親辰五郎は労働組合の援助もあって職場復帰を果たし、希望のうちに映画は終わる。

誰もが門地家柄によって差別されてはならない。こういった日本国憲法の精神をそのままに、一家は自分たちの未来を決定するのである。当然学歴も同じことであって、戦後の日本にはあらゆるチャンスが用意されていた。たとえそれが困難な道のりであっても、である。実際に戦後日本は「結果の平等」に重きをおく方向へと舵を切っていた。しかし先述したようにルーティンワーク化した職場には頑固な職人である辰五郎の居場所はすでに無くなりつつあったことも挙げなければならないであろう。

周知のように1960年当時の日本の政治状況は、日本社会党の構造改革論を唱えた江田ビジョンが社会党内部のヘゲモニー争いで頓挫している中、それを先取りするような形で、当時の首相であった池田勇人（1899-1965）内閣の元、下村治によって立案された国民所得倍増計画（1960年12月閣議決定）が国民の目を政治的対立から、各々が勤労することで生活自体が豊かになるという生活目標へと誘導することに成功した。しかもこの計画は当初の半分（最初は10年計画）で達成されてしまった。

先ほど紹介した「キューボラのある街」も、この計画が立ち上がってから翌年に封切られている。これもあながち偶然ではあるまい。映画館の暗がりの中でジュンと同じ思いを共有した観客も多かったと思われる。1960年代とは、国民が等しく豊かになっていく夢を抱けた時代であった。そしてこの夢のような日々は、1973年のオイルショックまで続いたのである。その1970年代を語る上で外してはならないのがウーマン・リブの上陸である。ベティ・フリーダン（Betty Friedan：1921-2006）を中心として男性と女性の平等を主張した運動は瞬く間に日本でも広がった。

菊地夏野は通例リブの活動期間は1970年から75年までで、1975年の国際婦人年以

降は発展解消していったとした。そしてその後にはフェミニズムという言語空間が設定され、1980年代を席卷し、1990年代になってジェンダー研究へと深化したとする。さらにこれにドメスティック・バイオレンスやセクシャル・ハラスメントへと分化するとともにレズビアン・ゲイの研究領域に隣接し始めたとして展開した（菊地 2005：148-150p）<sup>(15)</sup>。確かに1970年代という時代を俯瞰すれば、フェミニスト運動がマルキシズムと親和性が大きく、そのために中性化されてしまったというハイジ・ハートマン（Heidi Hartmann：1945-）や、リディア・サージェント（Lydia Sargent：1942-）等の指摘は、まさしく「マルクス主義とフェミニズムの不幸な結婚（*Women and revolution : a discussion of the unhappy marriage of marxism and feminism : 1981*）」が語っている点として共感できる点である。

また妙義忍が明確に示した時代区分に則して言えば、家電品の普及を背景として、空いた時間を主婦の社会進出のきっかけとするべきと石垣綾子が強く訴えた第1次主婦論争、それまで無償労働とされてきた主婦の家事労働を賃金化する試みを活発に論議した第2次主婦論争から、先述した主婦という立場のゆらぎについて論じた第3次主婦論争に続いて、職場に子供を連れて来る是非を問うたアグネス論争（第4次主婦論争）、石原里沙の専業主婦不要論を主張した『ふざけるな専業主婦』『くたばれ！専業主婦』論争（第5次主婦論争）、そして女性の経済階層格差を背景として起こった「負け犬」論争（第6次主婦論争）と分類ができようが、多くの場合は専業主婦と仕事を持つ主婦（本稿ではこれを兼業主婦と呼びたい）が、最大の問題提議として上がっている点を見逃すことは出来ない。また1970年代に関して述べればウーマン・リブ運動の存在も大きかったことは先述したとおりである。しかも第4次主婦論争以降は、結婚と育児を巡る論争に集約されていることがわかる。

たとえば平塚らいてう（1886-1971）が目指した地平とは男女同権であり、すなわち男女平等である。それは人間として一段低いものとして扱われてきた女性の男並みへ引き上げることであり、これは「女性の間宣言」でもある。そして母性を称揚せよという主張は、『青鞥』が単なる文芸雑誌ではなくなったことを意味する。

ところが相次ぐ弾圧や発禁処分にあい、『青鞥』は伊藤野枝（1895-1923）に引き継がれたものの、結局は52冊で使命を終えてしまう。

しかし今度は戦争という非日常が、一時的に主婦に家を出て街頭へと向かうエネルギーと自由を与えてしまったというパラドックスが生じた。それが国防婦人会現象である。国防婦人会とは、大阪の町工場の経営者の妻であった安田せい（1887-1952）が出征する兵隊の見送りや湯茶の接待を思いついて1932年に創設した団体である。やがてこの団体は愛国婦人会の会員数約600万人をしのぎ、約1,000万人規模の大団体へと大躍進するのである。

彼女たち多くの専業主婦たちは国防婦人会の活動に参加することで台所（すなわちイエ制度）から解放され、兵隊たちを送り出すという大義名分のもとで、家庭から解放された。これには市川房枝（1893-1981）も戦後の自伝で「国防婦人会については、いべきことが多々あるが、かつて自分の時間というものを持ったことのない農村の大衆婦人が、半日家から解放されて講演をきくことだけでも、これは婦人解放である。」と認めざるを得なかった（市川 1974：435p）<sup>(16)</sup>。

こういった女性たちの活動に対して家父長制堅持のために日本政府が編成した方針とは、1942年の大日本婦人会の成立（愛国・国防・連合婦人会を統合し、より強固なイエ制度の堅持を謳った婦人団体）であった。こうして再び女性たちはイエ制度（すなわち台所）へ立ち返らされることとなったのである。

続いて敗戦後の日本については、鳥羽耕史が1950年代を民衆がさまざまな記録をする年代と位置付け、生活綴方、サークル活動にテレビドキュメンタリーの黎明期等々幅広く網羅した研究をしている。鳥羽は無着成恭（1927-）の綴り方運動や澤井余志郎（1928-2015）の「生活を記録する会」に感銘を受けた鶴見和子（1918-2006）が起こした「生活をつづる会」が果たした役割について、綴り方教室が子供だけのものではなく、大人の実生活を記録する会へと変貌し拡大された現象を指摘している<sup>(17)</sup>。

天野正子は1950年代に起こった鶴見和子の「生活をつづる会」によって始められた運動を「大衆の一人ひとりが沈黙することをやめ、実生活の流れの中に消えていく自分の生活を取り出し、みつめ、対象化することで「知識人」とは異なる自らの生活思想の自立の方向を「大衆の大衆たる威厳」を模索する営み」とした（天野2005：81p）<sup>(18)</sup>。

天野の指摘は戦後民主主義が「モノ」に対する品質とその向上にも敏感であった時代であったことを直ちに彷彿とさせるものでもある。これは「腹さえ満ちていれば良い」「品物があるだけありがたい」という敗戦直後から1950年代の段階を経て、1960年代以降は「より良き消費者」として変身を遂げていった過程と述べても良い。主婦一人ひとりが声を上げて良い製品、そして子供たちにとって安全な食品を求めていったことが、1970年代になってさらに顕著に現れていったのは改めて述べることもないだろう。ここには『暮しの手帖』にも通じる問題意識が芽生えていたことが伺われる。そしてその前段階として綴り方運動が収束した後の1963年に生まれた投稿誌『わいふ』の事例に眼を移すと、公害問題が深刻化していった1960年代の高度経済成長期の問題点をも射程にした主婦の声を取り上げている。今日の我々は「明日はもっと良くなる」という一種の神話があったという、「高度経済成長期神話」に取り込まれがちであるが、実際は様々な問題提議を、この時代を生きてきた人々は持ち続けていた。つまり消費社会の到来と、その反動である公害問題や食品汚染は同一線状にあった点で、いわばコインの表裏をなしていたということである。そして和田悠が指摘したとおり、岡本太郎が「ひとびとの哲学」として突きつけた生活記録者の声を、モルモット視した知識人の態度に対する問題提起を深く意識し反省しつつも、鶴見和子が知識階層の善導と労働者との「共鳴・共感」という枠をついに超えることがなかったという、何より大事な問題提起を忘れるべきではない（和田悠2003：78p）<sup>(19)</sup>。

つまり鶴見は「生活をつづる会」という綴り方運動で投稿者に対して添削指導や評価・感想を述べてきたが、運動の最後まで、綴り方文者の位置まで自身は降りて来られなかった。

これに対して主婦の投稿誌『わいふ』の編集を引き継いだ田中喜美子（1930-）は『わいふ』を通じて鶴見和子が降りてこられなかった投稿者たちの視点まで「降りてきた」という点で鶴見とは大きく異なる。

『わいふ』とは、1963年に兵庫県宝塚市で創刊された、主婦のための投稿誌であ

る<sup>(20)</sup>。その編集機能が東京に移譲されたのが1975年であり、折しも国際婦人年の最初の年であった点は「主婦リブ」の先鞭をつけたという意味で注目に値するだろう。

ただし筆者はこれを持って鶴見に対して「非民主的」であるとか「似非民主主義者」と非難するつもりは毛頭ない。鶴見の事例における最大の特徴は、彼女自身が降りていこうとした場に到達することを許されず、逆に「民衆」に押し上げられてしまったということである。

これについて猿山隆子は鶴見が「生活をつづる会」を設立するにあたり、澤井余志郎の「生活を記録する会」に啓発されて「生活をつづる会」を立ち上げた経緯を「主婦やささまざまな職場で働く自由人の集まり」と規定した点に着目している（猿山2011：560p）<sup>(21)</sup>。猿山は「農村出身の同年代の女性たちの集まりで、生活環境に密着したサークルである「生活を記録する会」とは異なり、「生活をつづる会」は職業も生活環境も年齢も異なる人達の集まりであり、地域や職場などの生活環境とは離れたところで集まりを持った点に特徴がある。そうしたメンバーらの差異を前提に、そこに共通する問題を見つけ、解決していくことを目標に掲げた鶴見の思想は、日常生活と連続的な「生活を記録する会」共感を基礎とした活動とは異なるものである。」（猿山2011：560p）<sup>(22)</sup>と指摘し、したがって肝心の「自由人」たるはずの主婦や職場で働く人々が問題を解決しようにも「生活をつづる会」は、問題当事者の現場に会自体が接点を持たなかったために、当初の目標を果たし得なかったと指摘しているのである。これには同時に1950年代という時代背景が、各々の投稿者が受けた教育水準によって大きな断絶をもたらしていたことが否定出来ないのである。

## おわりに

以上を整理すると、女性が自身の手によって自己表現をしたいという欲求をどのように表現してきたかが概観できる。平塚らいてうの大正デモクラシーを背景とした『青鞥』における啓蒙的活動、日中戦争から端を発する安田せいが編み出した「国防婦人会」による街頭活動、「自分（鶴見和子：筆者注）と同じ自由人」たる人々が集まってあらゆる問題解決に照準を定めた鶴見和子の「生活をつづる会」の半啓蒙活動、そして田中喜美子の『わいふ』における、主婦が日常を書くことによるカタルシスへとつながっていくのである。これらはすべて女性の自己表現の発露として生み出されたものである。中でも読者がその位置にだけにとどまらず、「自らの心情を書くこと」そして「他者に読んでもらうこと」を期待したサークル活動や投稿誌は、読者たち（それはそのまま投稿者とも重なる）に、どれほど生活に張り合いをもたせたかは計り知れない。繰り返すが『わいふ』に見られるような「愚痴話」にすぎない内容であったとしても、それを他者に読んでもらえることの方が、はるかに喜びと感じたはずである。

これら諸運動体に共通するものは「平等感」である。つまり運動体に参加する限りにおいては、その実情はともかくとして、あらゆる差異は表出しなかった。特に戦後の日本は「平等感」の達成によって成り立っていたと述べても過言ではなかった。その上で「自由」が担保されていたのである。たとえそれが『ブロンディ』に見られるような架空の消費社会であってもである。



今日の日本は、その真逆をひた走っている。いわゆるレッセ・フェールそのままに「自由競争」が政策として取り入れられたため、階層の固定化と社会構造の固定化による停滞感を招来するものともなってしまったのである。

我々は今一度、かつての「平等と人間の尊厳」とは何かについて考えなおすときに来ているのではないだろうか。

## ■註

- (1) 中江兆民、1965、『三酔人経綸問答』。
- (2) 小熊英二、2002、『〈民主〉と〈愛国〉』。
- (3) 小熊、前掲書。
- (4) 原武史、2012、『団地の空間政治学』。
- (5) 鶴見俊輔、1991、『鶴見俊輔集5 現代日本思想史』。
- (6) ヘンリック・イブセン (Henrik Johan Ibsen)、1996 (1879)、『人形の家』(Et Dukkehjem)。
- (7) 堀場清子編、1991、『青鞥』女性解放論集。
- (8) 堀場、前掲書。
- (9) 堀場、前掲書。
- (10) 堀場、前掲書。
- (11) ルース・シュウォーツ・コーワン、2010、『お母さんは忙しくなるばかり』。
- (12) 加納実紀代、1987、『「電化生活」ヘテイク・オフ!!』『55年体制と成立と女たち 銃後史ノート戦後篇 第3回配本』所収。
- (13) 岩本茂樹、2007、『憧れのブロンディ』。
- (14) 岩本、前掲書。
- (15) 菊地夏野、2005、『リブの可能性と限界』、『戦後思想のポリティクス』所収。
- (16) 市川房枝、1974、『市川房枝自伝 戦前編』。
- (17) 鳥羽耕史、2010、『1950年代』。
- (18) 天野正子、2005、『「つきあい」の戦後史』。
- (19) 和田悠、2003、『1950年代における鶴見和子の生活記録論』、『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』所収。
- (20) 『わいふ』の詳細については拙稿「投稿誌『わいふ』における「主婦」の意味付けに対する考察」、『21世紀社会デザイン研究』(13)、91-99、2014、及び「投稿誌『わいふ』50年の軌跡：半世紀に渡る女性たちの意見をまとめたアーカイブとしての意味」『21世紀社会デザイン研究』(12)、109-118、2013、を参照されたい。
- (21) 猿山隆子、2011、『鶴見和子の生活記録運動における学習組織の展開』、『京都大学大学院教育学研究科紀要』所収。
- (22) 猿山、前掲書。

## ■参考文献

- 天野正子、2005、『「つきあい」の戦後史』吉川弘文館  
 市川房枝、1974、『市川房枝自伝 戦前編』新宿書房  
 岩本茂樹、2007、『憧れのブロンディ』新曜社  
 小熊英二、2002、『〈民主〉と〈愛国〉』新曜社  
 加納実紀代、1987、『「電化生活」ヘテイク・オフ!!』『55年体制と成立と女たち 銃後史ノート戦後篇 第3回配本』所収、女たちの現在を問う会

- 菊地夏野、2005、「リブの可能性と限界」『戦後思想のポリティクス』所収、青弓社
- 妙木忍、2009、『女性同士の争いはなぜ起こるのか』青土社
- 猿山隆子、2011、「鶴見和子の生活記録運動における学習組織の展開」『京都大学大学院教育学研究科紀要』所収
- 鶴見俊輔、1991、『鶴見俊輔集 5 現代日本思想史』、筑摩書房
- 鳥羽耕史、2010、『1950年代』河出書房新社
- 中江兆民、1965、『三酔人経綸問答』岩波書店
- 原武史、2012、『団地の空間政治学』NHK出版
- 堀場清子編、1991、『『青鞥』女性解放論集』岩波書店
- 和田悠、2003、「1950年代における鶴見和子の生活記録論」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』所収
- Ruth Schwarz Cowan, 1983, *More Work for Mother : The Ironies of Household Technology from the Open Hearth to the Microwave*, New York: Basic Books. (= ルース・シュウォーツ・コーワ  
ン、2010、『お母さんは忙しくなるばかり』法政大学出版局)
- Henrik Johan Ibsen, 1879, *Et Dukkehjem*. (= ヘンリック・イブセン、1996 (1879)、『人形の家』  
岩波書店)